四山藁

二

へ 5
4397
2

門へ6
號4397
巻2

昭和九年七月五日
購求

四山藁第二

隨齋夏成美著

豐嶌久藏
朱津包德　同
齋藤包昌
夏目包壽　校

俳諧小言　十則

俳諧をみるもきくもそれに情をて思ひを述る戯なれ
ども中に中昔まてハ多く粗言ヲ乃ミいひ来れ彩を
ちりぬ昔を其我翁よりはじめて詩歌の情をうけ風雅の
心を俗体ヲ以ものにあらはしたるを詩経万葉ホ乃

古体は似たるべしけれとかれ蕉翁の門弟おのゝおく
ゆるかとあるて道のちまにわうれ糸乃い浴くにみられ
たるもやうは此ひもて少けを持のまゝくはなりてい主師乃
ゆるる一かをのゝはあひうけせいおのくゝ乃うに蕉翁乃
一体といふ為く実に蕉翁を尊せるもれといふへうに
見をたゝゝ眼くき人の象といふ獣の尾をるて足をけりて
漆桶は似うる幕乃やうるるといをむうおくその象にあれ
ゝいふへうねうを以眼乃人のはおとの象を足ゝるを大に
あふへし扱蕉翁の風雅といにをりふにかの詩経万葉
をゝのをり形き草木魚鳥におほゝけおもひををせるやうに

風雅の心はようはりておのはゝなし出せるおとゝ乃人乃耳を
驚しかく百年乃今もめて無まるをひゝへは邪おき風雅の
心乃根本に土りひあ形ゝを少るは以出せるおとゝ乃をひとゝ
くゝめはゝしくあゝゝを自然乃姿をる侍るれし
その詞乃出るに趣ありなゝへを新奇乃おとを豪邁の詞を
はけはるもそのもと乃趣向はゝるく俗意よりにゝみ出せを
外をゝおとて内に実形く弟ゝりて足ゆい此所ありたゝへい
俗語鄙言あるもを中に風雅の心ゝりなし出さを人の心にも
徹底して鬼神を泣しむへるも此をゝりけれを古体と
いひ近体といへるもいさゝ詞の多ひふして風雅の趣を

けるにかゝるめざましき蕉翁一世乃俳意を盥洗
しておのゝ〳〵醜を四〳〵仕るとゝ和のはゝ〳〵向上の一路をも
企至る所紀氏蕉翁むかしいへる事乃ゝ古人乃求とゝ仕るを
をしめし古人乃求る所をもとめるや南山大師乃華道を
はゝへる詞をもて門人まゝ示されし乃心をとゝくおもへそ
けるに赤師を捨てあらに蕉翁の心を削ゝ形を瘦て求る
所を求るゝそのゝゝくおもひを深めて古き句をもんゝ永はく
紀氏文句ゝ中に心をとゝひいりゝくゝ神あゝて光を通し
氏紀もゝ
句をはゝるに至りて志ひて雅を求へゝすはゝめて俗を去ゝ

あゝと俗ある心ゝを篠ゝに去捨仕ゝを雅ゝおの〳〵はゝ〳〵めて為
ゝゝ〳〵雅形る趣めはゝ〳〵き詞を求るゆゑにその求る所に
つきてゝや俗意ハ出るなを句ゝもゝゝいゝ氏紀けひ志をもも
なほゝを加くゝ乃ゝゝくゝ志ひ為求る趣ハおほひ意の俗を
為ゝゝ氏ゝゝて句を業るゝ松尾ゝに世ゝとゝゝふゝハゝ
はゝゝあゝを捨ゝく業ゝてみゝに氏ゝていふ氏ゝゝ他乃句
再ふて変へゝゝ氏
句をゝゝに心ゝあゝゝの句乃心雅ゝゝや俗形ゝゝと心を
ゝめて詞乃工拙ハ分二等ゝゝゝ為ゝゝゝ詞をめて為ゝゝも
俗意ゝゝ取へゝ氏ゝの氏に雅趣ゝゝはゝゝゝき詞卑き

おもてもあへて嫌ふ所なる人乃句を見る事かくのごとくして
れのまことくの句をみむも味なくかつ所なくなる所〳〵
文章い實を言む奇言怪語を博をぬるも文章一扁乃実なくい
木偶人乃めてゝくゝ持ゝをもて言ゝむうさやゝ發句乃さゝを
かき示ゝ形ゝ世ゝよの中にゝ葉書する所ゝを見るに大やう
哥抱ゝを乃博ゝ多ゝの形ゝ図ゝを言ゝくゝ多ゝも持ゝ乃発句ハ鄙
言乃俳形ゝ〳〵かけあゝす狐乃裘に貂を博き合せ多むう
ゝゝ〳〵古ゝを俳諧文章乃筆格ゝ〳〵蕉翁に至りて始て
持ゝの趣をゝ〳〵ゝの趣とゝハ何ゝも詩歌文章乃實をゝ〳〵
ゝゝすゝして俚語鄙言を博〳〵ゝ形ゝを乃文ゝにまゝ

心ゝ為あゝ〳〵俗乃おち入むゝをおゝ所ゝ〳〵ゝ
文章乃ゝゝかゝゝ俳諧の工夫多ゝ去俗乃二字よりあり
俳諧を見て修身齊家乃道乃あて或ゝ老佛の心よりよ
ゝゝめて言妙に説ゝも所あゝゝゝ所ゝ持ゝの道をゝく
ゝん中ゝて部てゝゝれる人乃識をゝく俳諧ゝ〳〵ゝゝ乃
抱ゝゝ佛祖聖言乃ゝゝゝて俗中乃風雅を述る物
ゝゝ所に趣ハあゝゝ持ゝの趣といふを霞をあゝれむ
霧をゝゝめる人情乃おりひを物よゝへゝにたゝへて
ゝ七乃ゝと葉にをゝを博ゝね出する所ゝかゝいゝゝゝゝも
ゝゝも戯言ゝれゝに所にまゝていゝゝにもゝめゝいふ人情

屈られぬ小道といへども親切屈曲手行きまと雲下の屈く
なりしとふも侍り侍り
多ふ乎波い乗て自得きへしばら屈らむと誰もおほえ
ぬる事ふて持れ侍て乃物ものをけるふ工夫いる屈うしれ
鬼神を法りむるもあるてにをその事あれをおろそかにいひ
侍あるるてをなに乃感ふ侍むおほをこの国をを乎波
をも多侍ふるるひまい傳受ふ決ふ乃志てを乎波い
わきうなるむ物あるをその志るるは常淡平活をいへども
ひるれ乃ををあるひぬれを持の趣乃きふえ侍るふをもある
屈り侍る中に頌を世をもて變するを侍るまをを乎葉と

いへども頌よ志さうひて今言以侍る乃あるひめも乃新屈し
萬葉古今乃哥乃中い侍の世ふもちひさるて乎はも 粗ふえ
侍を志ひてむりうくいまむ人りむひてを 俳諧一家乃を乎
波をいまむもあるるるる
附句ハ第ふ乃ふ第ふ句毎乃轉變乃ふてのくを定めるを
ふれをも一乃ふ理をを去捨侍るは無礙自在なる屈し
理をはあまて行まて第句ふ附侍るむをいふ乃ふ乃ふ乃響
うはりうをわるのある一線路を法ひて乃屈ふ乃ふ乃を附ゆく
ふあるをかくいをたにいひまきるをてあるにふあへたる
事乃さをに侍れをもをのふ侍へある屈へうりいひをすを物を

を教理論りて蕉翁の句てらしる事をけれを後世り
七名八体二十四体ゆゑいふもるれ示初心のみちひきふして
僧家りいふ名目部乃事ふてすきも眼乃付文る考を論
すゆりて多くさる事ゆりうれ諸家の教方の俗をもて句を
求め句を法ゆるむとせを〳〵へるひとて大ゆる妨をあれ
新風〳〵技のゆゑを風雅乃心いもやうゆるゆるあれを
也理乃外あるわさを理をもてたさんやもるゆゑに水を
上り胡蘆子を法ゆるれうまくはひまいをり新風ゆ
ゆるゆるゆる理乃外といふもまを而謂あり一向に理を放
下せるふいゆるれ多理にあら入理り縛せられぬやうりと

おりふ風を外りけまいに附所を定め法多物をまくをなと
して付けるむを甚無下乃事ふてあるひを遍序題をもて
言をたて或い起承轉合りあて又い天地人乃三才よりなくく
るとをむいみをく無用乃辯にして附句の害られを甚〳〵
きい歟〳〵
去嫌を變化乃大体をまるへるもやるを連哥式目乃古
法を始として御傘嚔草ふ乃諸書ゆのひよりよくはま
ひるゆるにまるうひ多を乃はをひもいよく源〳〵とふへ〳〵
凡變化の道理をを人わきはへけるん文字をけるにはふ
風をるれまり一句乃轉變をよくく心よりあて案をへきあり

第一ハ句乃好悪うしてけ〻合を第二の論あるべし古人變化のまめにまうける法則あるを手書彼書の空論をもて實地の附句を繫縛しかへりて變化乃趣を忘る學者まゝふ心をぬて變化乃事をさへわすれはてを一坐の爭論ハ爲みぬへし本よりて諸書乃さゝあひ詞の數くいうる強記乃人形を中も一〻記臆せむるすかるゝ詞ハ無盡の物あれを諸書の法則もまりたるその大綱をあけうる物ならしけるとて みゝるに古法を廣く爲きてけるに

會席乃ありさ猶いとも風流なるゝいうゝ花紅葉の借ひ はくえるゝいふあて西行法師の扇文臺さてけをう同調の

友三五人花晨月夕におとひをのゝ長ひうゝひよ沸きて情を ゆるいとめてうき程ひわるゝ懐紙の法堅懐紙様ふる しりさゝうる法あれを今ハ世の緘る物にあるかふへうる 句讀のあう人ハめてさをむを聲乃高低ハ あやうるを をうゝかるに東坡居士の三分ハ詩七分ハ是讀あるといひは 思ひうるさゝおほし

世人の襃貶けゝに多のむ屋うる所下里巴人の和する者おけく 曲うれを和するものいうくすくなきうるく今ハ世の人乃 きをとるあひてわの心におもをぬ詞をはけ侍るハあれ 世に爲のらふ嗚呼の者ゝいふ爲ゝ知音の人ひとをふうふて

おとなし待れけらしけらふ志る者あらハ千家の子雲を
待むもよきをうしかるへしかくいはゞ自讃の心なきにすゝみて
稽古乃害あらんやおのれる人みえ乃れる心いふく乃おもよき紀
所にそりはまハ此の風格次第に卑俗にもおち入屋なる
ゑくし詩ゆゑをもて人をおもしめいはむゆゑをあらはす
世上に俳諧を唱ふる者をきりまふしておほむね俳諧の
趣をしらす白眼放言してみだりに他の人を抄しるその人
いかはかりの上手なりやとおもふに流さおかし俗士なる乃を
みだりに人を驚し人にまされりといふれむとす此心いか
なるの俗腸なるや易にしる者を易をいるにまさる

先師もいまはいふ者をしらす法と云ふも志ありて言を
いふわれもよきよみとしりけまハあらし

青蘿句集跋　寛政丙辰年作

世に得らしとすゝめられもれておほけなく満ちるなき事なくて
はしめ乃巣に見るもちもおのがはらく火ねつきのうきねも
めくりくる此屋をねへき身いつかなもなくて身ちもゐえせねは
さらに紫乃みちあふきさして青蘿句集をあつめる人のうき世に
ありもし時ハひとなきりし蕉翁乃方すにせちなるその實を満ちあひ
うつせるを氷をの晶やのあらしか乃晋子のやせしやうるは
時代蒔絵といふものゝ年経てもそなはる色あるをるにたとへ

風情乃ものをはくせるあと筆ハおのれ世乃いはゆるまても
かなを天ふもらめ地ふひろひて歌を人ゝ乃ゑうゝを形まる
事ありうゝ紀わさ形るへしゝ古をゝ見をゝむ人ゝを愛う
ものゝの心をはゝくゝをかひの中乃玉をゆうゝさぬの火に
いるとても歌をうせぬ時のひゝ至るゝ紀ものをや　此集の
ものゝ名に一頃をゝへゝとまを国まてきまえゝるいま乃
栗のもゝ中はゝゝ乃心をはゝをて勝鹿乃野人贄亭成
美書

句帳小序　應汀息霜

みゝゝあまゝハまゝけふらふゝとゝあゝを無心所着乃体ゝを

此体ふゝくゝゝるゝけゝて万葉集にもゝゝひの牛とゝめ零
今の俳諧はゝゝの多ゝひふゝて心頭一切形変慶ゝ形ゝ
ゝきゝたるゝゝゝもゝく萬象とゝ紀を安ゝ乃ゝ奇ゝを
とゝふへゝ昔海のゝへ乃鴎をゝもゝする物乃ゝを鳳翔
浮沈ゝゝゝひてひゝゝをはゝひてあゝ事ゝゝある時此
かゝものをゝゝへゝむとおゝひてゆゝゝゝ技の多ひゝゝもゝ
ゝゝ沒ゝて手をむゝゝゝ世ゝといへゝゝ見ゝゝ感ゝゝゝと
わゝゝ形ゝとゝふ屋ゝゝ沒ゝゝを無所住乃ゝゝゝをもて
物ゝむゝひ多ゝゝにゝの心を生せゝ筆木鳥獣ひゝゝ
くに感格ゝて色をゝねをゝゝるゝゝくゝゝゝゝ乃

ゆゑひまいらせへきものかや

曙句合序

應道彦需

むかしさうふるもあしといふをいはゞなにはの葉乃なりひて
して其の心は変りうすとも彼こしの韓非といふ人のいひける
よしなる抱末乃中きはまを詩といひうたといふもんはおの
はやかはらひ侍るへし 今の俳諧もまた其のなにはふしにて
おほまの姿をいはゞ 桃乃はなさを鳥乃涛のうみ櫻乃さら枝に
霜のきえたるけしきなき残雪 はなし馬頭初見米嚢
花はなは時しるのすゑまで乃うしておほまの作意をかはらう
やうしあるひはうすくもおくくも深くも浅くも おもひ
さらして心のひ出座ればさ聊かし 許六曰詩の國とは此を
何ぞ俳諧は又かあるべしといへとも國とは疆界乃事とまて言
葉のけぢめをいふなるへしいはくちきあしきもあくまく侍るも
からにてわかつ座もあるなるをや此あるはかく句合といふは
志のゆめ乃ちうく也 明け雪乃何した鳥乃からとなく
見あるいまは為し志頭有白き紅の何らもに社鳥乃羽色の
見てなさまてさやかしく倚きる座くも紅をいふて心の
おもむきもその如くにかわかつ座にいひ出なんも
をさうし座みはく其の魚乃あけなのを名付よひ侍る
やりやおほまの右ひだりに判しをおき わかるを狗子の

佛性の有無ありけれ誰かしらく何も此いふもありなしと
いふも至極なりす猶しかれハ風雅の一佛性をまなひ来して作りの花
乃春ふか夢語ひ何もの実乃秋ふか覺何く有りさ待ていれ高
のさす見れ作しといふ為し古人云唯阿甚相遠なりと言のひ也
さしの心をもてかきまの序の心也なす

野狐録序

ひまもすから茶をすゝり烟をすひて弩弋する事何くむくいぬ乃
せくく也のこ日をわくれるさと既に六万八千日雪しもハ庭に
ちりなる木のはにのみおりなせおりふにたまゆかにわすかしらす
ふり侍もりてはしめてるそしいさ侍らなる也しをわりふをうくく

俳諧の道に於しさいひておもひを尽すに此ありさまさも年ひさ
しくまハこの道の次上手まも至れるなしむと一大虚をはなれて
國く乃作者よりも文音志きりにさ作り句を求め評をこふ
今は此まゝしなるいふむも中々人めりしくまれにわするせ学に
志さりひて書もやまとのひをおくりし三文字いかもしなと ひ文
なほせ於もおのほりかゝぶなる為し 侍り也 俳諧ハされ一定を
わくをへいハ一定不定とおもへハ不定なりともかくの他者さへ
何事ゝ侍へて家いふすをかなしほいとしされくなかれまた 多也
ひそ一精语をいやうちて五百生野狐身を隋ぬるまさされ
多めしいろよ多く志りそ記て己心乃面目を見むとまハ志りし 家

志をうばしてゐたせし年月乃戯悔せむと此すをけすめふ
書て文音乃法好士乃ためにとわるなり

句帖序

あををもて水に浮べるをかめてゐれる人ゐるに乃事浮き琴の
緒あちらるおとまきて拍れのをそこいひるふ人もありき人の
ゑしらぬすをちくゐれふい物をゐの世んのふるゐてちるて
形り今の俳諧まとそれよるそらふへく無一物乃心頭ゑ事
うこゐある俤意をゐる屋くゐる人ゐるてゑしまるあけき
ぬふかしゐ玉くおほくの俤者のをゐけくの句乃中ゑと
ふゐれふをひゑけはかしむるん拍事をすける心のあきふ

ゑりて人乃ゑしらぬさゑひをもゐまるれゑし水乃ゐら
ゑひをわき法のおとまきゐれるもれるやみちのくゐ乃己因
此すをはしめにゐるれもれいうしかの俳人夏成美形り
わを祇けひそうくゐれふれ形すゐけるにゑりてかくいふ

題乙因旅日記首

浮きおほけゐの世紀いきえ毎やきさつを乃けにはれゑの
すみして書つ紀ぬんれ拍ひゑ事ぬ旅ねのあけけふゐみ
うへゐゑうすゐ紀心形るへしゑ教えむゐちるゐひゑい
めそわくんちすゐゐもゐにゐめはゑ事ゑ度やいへふ笠
のひしけあるを浮ふにゐきて死人林上ゑ卧癩盃に

今つゝて三百余程の芳はきもさすがに名ある人お物とうは
らふ方おほく賡句といふるすもありて世江戸に三旬あ
まりの日数を経て今はこ故園に帰むとすみちのゆく
さにいひんせ巻〳〵韻をみちぬるもうれも野分のすゝた
みをうをうく行〳〵所の家を矢立にとゝめて書はゝね
つきのひはゝ多すゝ〳〵を捨て人にかりてはうむとゝ残
こひねふかれすゝ心のおもゝにすゝゆふ羅城門を
すみてといふ鬼あるの氷消てはうあるに古き葉ををへむ
ものゝ枯れ時あかうと心してはゝ物のはゝにおゝふ来
わうとゝ多ゝふまて友人夏成美多田の森蔭のゆふ月

夜ゝ筆を採

金翠句帳序

忘年の友硯亭はねに来りて雨を多きくうりて以風情を
もゝむるに胸中ゝゝくして一年のたくさん多ゝく句を
はゝ取ゝたゝもゝとわをいゝをゝに俳諧い無念起と
ゝゝを寸後中万巻の書はゝもふふふ文はゝに枯のちう
ら残かゝに松のはゝ一家乃立夫あゝて世念ゝを一有を
ゝゝ一有わゝを等象とゝる見ゝ変おゝふ世ゝゝのゝ
物多ゝに心乃師とゝりてゝ系にお情をうつもたをゝ
一紙小画くゝゝくわゝに一筆をおゝゝをゝて枯のゝゝち

ものさくにとりまぜ水墨乃けしきと丹青の色をほどこし一大観とかまへやもをおけめをおもへを多に一張の白紙形のおもしろ物と心やすきて形をあすなの形ふ変を矩乃けうこに規によりすしておのほうゝ廣莫乃けしひふあをふ屋ゝうれしもや説経師の馬乃ふあをひふなゝふすれまこを序やを

書句帳首

いはまこう先ひつまこの後ゆゝんをけきあをすとて けさやく起おて例の乃ゆゝにをゝめ人のうをけをひ後うをに持まこい人まをる森すれおを登けるかをきちてけて心さすす處にひありぬうれを此やうの中けゝをお後れむ涙ふ屋ゝをく乃梅乃春ふけれをちて咲おるも八朝梅りををふまをけふこにるゝ涙といふ屋ゝ夜ふうゝ終るわこの空ふのけくらもおをゝ少をあまこうをめをけるある人のいをく水まはく山ををれまる所にひるをを心画の中にけをくるおりひあを後をを上をのうを画乃空ゝひをハけゝに後をこの山水をわゝれ乃をを地をすふといへををいまこう先ひはれう後をゝん俳諧の流れまゝくかく乃をいをゝ

浅草及胡小引

もすちをひうみ後うまこふをこと業をはく事事ふふ所

おほよそ詩を句作つるといふ古人いへるところあり文臺をおろせは
ふるけふこそたけふも先達乃いひすて書すてたるちりやあく
たをあつひろちすゑつへしても人々も見なまくをいふはうなつ
しやかられ世を為し白片の楮先生

贈短冊掛辞　以住吉松樹製

姫松乃なんさくら多人乃もせよりおもむろし残日おもしろことて
かうそひろふこのよ絶句もいひ出ねいはるはつるものなく庭うになるを
しを吹石主人に適ひぬするほまりの紫乃おもむき庭うにおもひ
めくらして合抱のぬしくおほ女かな作意もえまほしきなる

賀不老庵落成辞

不老庵地をもとむるにくさひさやすへての人に云う清く
所のはかまりぬれあらひ形しに至翁なよりけりつまて雲を
はなれしき心をかゆるよりはや庭か形りあれなれ街中
物に住てさまさまるを川をもなふとむへし志の名ひや冬乃
日うちよ紀方をもつて賀日乃たのしみ小春をまちむかへ
市まちの行りきぬれむけくりしはしかにひとり此庵乃
のそみれむ地するはかうしの心操なりまるしよれる庭し

示若輩辞

若季作の門にあつまる松乃か跡
年乃はさちにもあつぬるの色もかはつまりて月なみ乃俳諧

すに忘年乃友とゝもゆるすにや日野原なまの蓮亂はら
しゝの園まもるの子をやもこせしゝもゝとうゝひて中く
ちゝしまもあくさ無わさゝ乃ふい蕉翁忌しそ伊乃めゝも
ゝたゝひまれを松のまおこうゝまゝをもゝ拘さゝめのはうをめ紅さゝ
ゝねしてゝゝ乃しを沙法を庖丁ゝ乃ゝとゝお紅ゝしのゝとゝ輪
扁ゝ池ゝ乃しに教車吾子等に法ゝく むゝとほゝゝうゝにいふ
ゝ乃てゝくをゝゝ伝ゝゝゝ

新乃しゝを風雅の心もて侍ゝを

賀巣 兆書画會辞

万花校を辞しゝ狂風おもてにゝ紅ゝ教書画のゝをひも

ゝ乃ゝ空て舊友巣兆同好をあゝめ筵をゝくゝすみゝ川の
落花を水絆にたゝくゝとゝみ入樹ゝの木乃めを莞既ゝ
にほゝをゝう此日天ゝを風ゝ原に春のゝちめもゝうに
をゝゝ法原しゝを集ゝ門人等東倫のゝみゝをもてゝふ乃
費にゝをゝむゝすゝ世の中めゝをゝをひろうにゝうゝゝき
いふもゝゝをゝいゝくゝゝす凡四民ゝゝゝをゝの余乃極民
伎藝をもてゝ服乃はゝをゝくゝゝを人ゝ教おゝしゝゝのゝふ
人ゝゝゝう世を貪ゝ心ゝゝを伝しゝゝゝゝくゝゝかぬゝ行ゝゝよ
ゝちめゝゝ乃ゝゝゝゝ世をゝゝゝ女乃仇ゝゝ乃ゝゝもゝ
人のいひゝひゝむゝゝかにゝゝゝ風俗をゝて法ゝていな

みもとをしこくいひまろひまるけんをもはれるうと
おのれにけていまれるあにこころあるく無欲清操の人と
人もなるべうにはまるうなして志をも世人をおもし心もち
ひ彩れ家黨あれを瘦あるくいや笑ふ也その伎はまあるく
人りへをもなへうすす一句一帖乃筆痕人をて珍んとつみ
もすふまきを賣る得ものしるものまに賣る事れし
丈夫乃心何を恥あれをけうるむやをやるを兆の画氣韵を
むしやし筆端妙をあるふをやそれ人来り冥へくわき
書画のるさのむしいへをも藝はまふるきハ人来り求めて
をやめたるちて賣むをたるみ乃集會乃めてをうら

屋をしけるよりく楚ろをまいひまるを聖句三章をひ彩をも
してたるしを賀すいよくく此伎の世ホもひろるをまをあひ
ねふをのいわまはと今をもはまめて藝ホけをそむ事を
おのふ乃を

花鳥乃夢をを屋つらて彩しに筆

をを人のつを屐も見ゆを門の花

おのし彩を人をのをして春をゆく

題燕石談古室

伏生の記臆稗田乃うしの物おはえたりてをう世をの史官

筆をけ〜おのすいくむ〜乃あとゝもを今乃世にあゝて
めの由へはゝるゝふゝの徳をさゝにいふ所くもたゝに古今文
物のかゝるとある治乱ゝるゝくゝ乃いきほひを人〜くたつゝて
ゝ乃ゝのおゝくかゝる雪乃すきくゝ此国乃ゝぬゝ乃ゝゝの功
臣勇士とのおもゝちゝゝはひとてもゝ多く今ゝにゝゝとき
かゝゝんやゝにいひあるに麒麟閣といふ堂にゝゝ堂ゝゝ
ゝる画やゝもひろゝにおゝひ所ゝれちゝくゝゝゝもゝに人の
いひはゝふゝ孝子義士乃伝乃と今乃世ふゝちゝれとゝの
ゝゝとふゝみにかゝゝ〜たゝとせてその實をゝつゝあやゝゝを
ゝゝゝさゝ中にゝゝ多ゝゝくゝゝゝ

ゝ代のゝけすめ秋霜三尺乃ひゝと月日ゝゝゝにてゝゝ世乃
ゝゝ恵みのゝゝけれさをおゝひはゝれゝ弓乃ゝすゝゝゝたゝへ
ゝゝすをけへゝおゝゝゝゝ浄ゝゝゝて月毎に集會ゝゝ
かゝゝみに徐ゝとあゝせむゝゝゝ乃ゝゝゝゝ飛耳長目ゝゝゝゝ
かゝゝにきたえゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝく舌おゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
鳥乃ゝつゝき夜の日をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いひて又ひさつをうそへはしめ年也

寄相撲題言

其の声をきくにそみちおもてをえねる心はしおもしろ人の
はるにゆうゝそおほゆき傾蓋ふるうるおもしこいるとも
ひるの車ふやかるゝ寄そのの聲をきくそのおもてをさしに
うもはつきのの小松ひくくるとうるのあちの系のちくま
変うそうはすへて此園のにしひむしをはるゝ多たうひて
多ひをちる為み作意のちゝをあるそふはゝにおのく
心既の誰ハ此変に工夫はくうれいその場ふおもて系ちゝ
ゆくそおのひちるて其聲をくそのおもてをうるあちや

せむ堂ゝ壇光とゝ法師乃言雄の文覚ゝ名をあるそふ
おもてハ月ちぬにみちの月はゝにあひて多屋ゆきふ系
法師ちらめとあゝ歩にゆれとるとやうふ年も
ゆくしや小首かゆておゝ多ゝしてその後得意乃ちそ
ふくゆゝ月系やゝ世捨人のうへハ奥ゝ系所行おまと
ひやすちにすさぬるゝまたなもうゝふたをひあるぬ屋
多ひくゝ書状よいひあゝぬる句やも乃ふゆにきてえこぬ
屋うにゆゝ月ゆくをうハ多にふ多ゝぬおそを作者と
おもひわやゝぬふうもおそひやとひすゝに系庵も
多ち入うそふくゝに状おそをて合点をもあひはそうはめ

わすれもなふなれと思ひこしぬる時はまさしくうましきや
おもひてさらにその御恵をきく梅のおもてを見るへき地を
するなきを物に書付て警古乃まうりにせむとおもふに世に
ある天狗おとしいふ見物かの壇光ヶすちさにありていさ
一番なと思ひりやせんかなと於すり思し

梅園記

梅をおほくうゑて梅園といふかたはら松をうつして松亭と
号け柏をうゑて柏菴なといへれはにきはせるならひ
そもそもここは傍に寺あれと安樂寺といふ彼清しみて
ら乃名を梅の博くによ座ぬふ紀由るある物なへし

その南に菅神乃み座しましき以つき歳つふ事ゆれ乃
世よりよりこなたありしるしもあらつ世宮居すり文雅の冥
慮をいのるに渇仰乃あまりまに御愛樹の一りもの栽植ぬめ
てより根をむすなを枝かちへ年々に芽をわかちわか木を
うゑるへまらし清く大きな花の不類をはくせるも直脚ハ
野梅枝すくわく座論ハ花おほくして落ち多し緑萼ハ句ひ
おもやかに豊後といふその八梅の實をもてなを世とし八朔ハ
かなしれさくハ寒紅梅乃名をひるして鵜梅といふハ花おほ
まに消梅ハ小く座くにかくをいふあるハ龍乃おもく臥な
その雲林おもくむしろ生つれもの梅の外ひとへに座へり

多きなるかうす色におのくうちをゆくの媚をはくす
かくてを江南乃天氣庚嶺の色に少ほひみちて屋うて園の名
実ゆう事はなうしをその中に小亭をうつくへ賓主四五人
猿をすほめて狹しといへども多くもとうを柱ゆうて
ゆしのうちうるもとまるかの心も多ゆうに一炉のうえに身を
ひとすほく大ゆうの酒瓶をすゑ後圃まへ杉のはうかうさ
芋栗乃を醉郷に客球むうゆる時へ三万乃榻をふさすも
まううれまたうめを事はに此國ハ雪ゆにふりくて春氣乃
ゆるゆるゆうしまの山乃樣ゆうもの人の園乃をちう
はくく氷肌玉骨はうめてほゆるむうを花ゆ對して醉ゆる

多ゆく酔てをれまむうをゆる時ゆう主人ハ花まうをれる
人ゆ酒を隠まうゆ人のもくく風雅をかをれる人ゆを
今ハ十よ年乃むうしに江戸ゆ行をへゆ深川乃古池を
多つよ事ゆにその世乃をとみをて在せたる芦乃多てを事はに
を根ゆしにして為仲乃ゆうゆう長櫃をおもくくしうふさ
うめ沈くまくゆ此盆池まうつを沈球屋をて園ゆを落城の
入道ゆ此亭にゆをくゆれをうを乃句を右を屋をうゆ芦の句西
上人の善通寺乃松まゆ影せしうゆ家をはみて杉のうゆ主人
乃心樣をうつをを南ハ阿多々羅根をむうひて万葉の古名球
ゆのゆ北ハ磐手山をそむ交て源二位乃詠をおもはまうを

見わらうちむりひうちをる所ホハ行〳〵はけりつ仮めをひ紅葉ホ
来りてわら葉菴にむり〳〵徳を紙はけて壮窓乃行〳〵陶〳〵筆
をりて醉の中に圖〳〵はけりぬ見を壁にさを杖をてかけて
人のせちにはひ〳〵雲乃舟あ紀も出へく杉海田家附さらの
圖よむひて落〳〵寞〳〵少先の中にその行をひをゆもに世堂
ゆを杉ふわも夢寐に園中乃あもむさをわすまに
ある〳〵わら贅亭をゆもかや以あやゆさ乃使て世あゆを
書ておくるをちの千里に一枝のさるをよせ〳〵心さく也
見を記ゆす

題龍几句帖

尾ホもて雀て れゆうて紀見はそあ屋ゆさに〳〵てうち
あらはもにこるをもて すまいうれるはつ家はつ家〳〵ハ
こう祢をむり〳〵すれ心をもはやまつれ学ゆそ俳諧乃句法く
ゆも玉洞屋うかくをある屋き世人の褒貶乃ミおゆうして以ひ
出れを神情ゆもひはふるをれりてそれ的て以ひ行れ新
ゆうをかるへし多く学念志をも一気のうれおておのつう
天地乃運動ゆ志をうひ萬象のすをにいひうあるをを
めてをるへ多稜 ちまて以諸方の好士をうち金音玉聲を
をしゆすして此帖て一句一章をゆるし多をゆんゆ
れ雀て れゆうて ホ尾のおくし多へ紀をあひね

うふまれ也

素郷自句合序

かさはかまのはのうへに妬る河の玉をあらそひしハ名
利を嗜しむるなるへしわさへしあるにひさつれなるをひあり
同額乃句を蠻觸ありかさわたる わきにうちまかせを志らく
わきまへふるれ作者ハひとるを作まをかちも与ふこそされ
ちゝけもうまへに甲乙とももに一時乃わるひとつ作る乃也と
おもふに世うし西行上人のみもすそ河ありハ後成卿のおと
なしそへらまへ一なるはるゝりのちわかすゐなる勝鹿あり在し
素堂老人それよなくしひて自句合なる判のこゝろ聚もあるく

みつから書ぬるまてを先縦としておもひよるなるやうしハ
判者もみつから作るぬ西紀を書紀境をたえて わきまよ
ゆつまゝれハうれ素老人のすみしつくしれ名をあつし
そのねにへし出ちう後に興して心のおよふ変を志るなす
おほよそ素郷の句を作るなかく名利乃間をはなれてうさ
はゆるのは乃めつらなる是非あり心わりしおもて聚古代に
して意匠世におえるる伐る残わうはくなる紀心あり是非
せむるおもふるまつる作まにあつけのち乃人判乃おもてを
みてつかれいもせ迷中の是非ハ是非倶に非也や

題空則是諧後

[illegible]の[illegible]の[illegible]もわひ
しれもの中に書足はしてひちさ雨といふものをうに[illegible]
おうやうなへぬ管乃小笠に贅はあるうるくさの[illegible]
[illegible]もえとあもとうちをうれの錨きて[illegible]にぬれて
踵のもとにはまりもとあるて[illegible]履乃尻をもて足半と
いふもれまれて爲のふとめくやうにひあひあるけとあは脛乃
[illegible]て泥[illegible]にあらぬ世に俳徒してあるよりは[illegible]
来まをなれ帝乃地獄[illegible]おつるやうやまをやしに
あるにはうひ捨る紙筆の罪ほろかしにて六あみと
めるとふ拘まるてするにうはぬ嵐のわひ姿は

続詞花集
人[illegible]ふて仏
供養[illegible]
[illegible]雨のうて
袂[illegible]れ
礼盤[illegible]
[illegible]
膳西上人
[illegible]
[illegible]
法の[illegible]

[illegible]後乃世もけをとれ[illegible]膳西上人乃説法し
[illegible]所にあもて衣の袖[illegible]ハ法乃[illegible]
[illegible]と[illegible]板乃ナ紀[illegible]わひ[illegible]に[illegible]
けうふ[illegible]の[illegible]れとい[illegible]
家に[illegible]破[illegible]一本とおむやうにて求め
[illegible]赤[illegible]紙の古骨の荷[illegible]の[illegible]
紙に人[illegible]肩脊に[illegible]中乃ひ[illegible]
此古傘のほ[illegible]佛の輪後光とふ[illegible]ひ
[illegible]此中に攝取せられて四十八本の骨くも
弥陀の本誓あはあの我ホ小根小樹のあ[illegible]凡夫乃

一味の法をふうぼうして踏すへきを柏子ハ一遍の
称名ばかりも此功徳豈むなしからんやと果ハ
ゆみよりて戻きをしらしをきとあり麦宇ゝ物語
せうはに随喜の筆をあつ取て此画傳えんを待る

麦宇句帖序

観音めぐりと乃詠歌帖道者頓礼の念佛簿なりふ
ゑなひよ吾やもうゝ乃句草紙とふハあそ霞四く延の
人くに狂句ひとりつゝ書ゝめてやとそ紙のすゑ人を
ゑつめる使とゑす けまて三日の糧をもゝ行ゝ千里
独行すゑい風雅にあそふゝ話計也吾友麦宇ゝの

ふるくしてみちのくゝ果のはてゝもそめらんゝ書ふをのわう
きにのをみてゑをむをうゝ夜乃雨窓を歩て山館ゝ枕をさゝる
ゆふゝ暁の雲ゝ笠をとゝむ野亭に杖ひくあゝたをとゝう
ゑをすゝ安ゝやゝゝゝゝ子ゝゑゝめる丹青乃業も柱嚢せゝく
して彩筆ばかりゝる事ゑるをハ筆のたゝみも吟ゝ行ゝんや
宇ゑけをゝをと徇中一味乃俳諧ばかりゝゑをもゝ乃ゝ
きくもはをうて心の友とゝりて旅ををもてやをゝのめる人を
はゝるをハ五歩に友あり十歩に朋ゝ季豈ゝ旅を書ゝ
しをゝんやゝと山水泉石の日ゝの旅ようをとりゝきすゝて
雲烟の眼よるゝれもはみゑ吾画中乃趣とゝるをハはゝに

古人の筆をかゝげて此人の心を尋ぬる此ものに
ひとつもおもしろき所なし張璪が外造化を
師とし中心源を得るといひしをわれ我はなを拙
なれども此この筆跡の序をもかくへしとて湯に
書ておくるものを多田泰老樵夏成美

日牌帖序

安期羨門我をもて名をきく事人今いづくにあるか大椿
靈龜わが甚事にあらざるをもて知れり是いまく見を見
二鼠齦牙すること白駒蹄跳猶加後〳〵誰乃人のはひる
此婆婆の住るつ屋にけきを菊阿佛が上手も記れ

歎せ〳〵ものを哥詞鄙也とゝ雖も忘ふるの邪ものに兼應須
もとゆ未の名師の終焉を諸集に探り事歳時をはまりて
うふ〳〵輯録して一帖の日暦とすれをまにふまて一を
ひも飜讀せん人々すへうを綺語乃因をのがれて多く
佛乗に帰せん事我あるへしねがはくは此風雅をもて
ありねく一切有ほとあし〳〵吾ホと居生と共に上を社
地位ふ至〳〵んをを帰命誓首敬白

藻實草序

李義山が雜纂ありてをを清氏が抗けるし清補が物
くさ袋其角が雜談集みれをを趣をあるほをを物をを事

ふるまひ書ふるもの何をよる所あるを世毎見えねともあ
おのゝ心に入もて世の中乃憂喜もわすれるに
あはゆるあやしゝ見きてふいふあるとおりに為ゝ
人の心をうつるくふ所をいつるもれく書出るゆゑなるへ
しきある人のいひ伝へせられあくみへ見るゝたるに
秋去後頼芳老人の書すきみし物行りるの心乃ゝを書
かゝく辯の為くみれる様をもあに狂句れとおほく出せ
為雪此為くひ乃幸わきも出て見むとおのふに付て何
事もゝ生に おのふ心ゝ行ふもゝ為ゝまゝすへてあれ
ゝむとわゝひて為ゝぬをれよゝをけゝめふゝ為ゝいふ
陶ゝ雪心所著の筆硯取て誌之

發句帖序

すみゝ河乃蘆荻霜不卧て人めゝ結ゝる苫乃扉すゝ
ゝゝゝくゝんゝゝ行文に備中の國より書音信ゝ先のゝ
挾室に膝をかゝゝ談笑あるすゝゝあわゝゝ斗外主の白
楮一帖をゝゝて ゝれ不物出ゝ帝ゝゝきゝ由ゝて潤筆の
為ゝて一尊乃ゝゝ酒硯れゝゝ世紀蘭陵上箸の為ゝひ
閑寥乃ゝゝ友ゝゝめゝゝ見をのむ陶ゝのみ
陶ゝゝゝゝゝ呑はゝゝて けめて筆をゝ新むゝ
清ゝゝ乃女のゝゝ帝ゝ為ゝむゝに筆をゝて名為ゝき

[illegible]

好士の陶々[illegible]俳句ひろう清書しあむ其 れの
清[illegible]為[illegible]れも清[illegible]もの[illegible]き物あり
[illegible]れる物あて れの[illegible]腸乃[illegible]くまて あるひ
はう人面をあるするゑ此やせむ清〻ハ風土の物と雪も
此一帖[illegible]をあめ入て常にくして帳中の秘とせむとい
是一歩をすめ[illegible]して名所をたるやいへ[illegible]ふる記誘を
のやう 彼鬼貫の禁足紀行乃たらひあもよ[illegible]清
しとそ[illegible]清〻乃ふ紀を大[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]
ほめて夏田老樵夏成美誌之あるこ[illegible]

めてこゝ[illegible]

月川上人追善集序　應塘里需

法を観する事正しゝ心に着すしハ邪におあ[illegible]
止観乃文を心として世ようきさる法師あり[illegible]て
佛像経巻をはあて湛汰瓶ひとつも身ふ[illegible]新もの
[illegible]くて今の世ありうるにはたとの世捨人[illegible]ふ[illegible]に西
行乃抖擻をたゝひ芭蕉の漂泊をうらやみ清〻西ふ東に
杖をたゝふ[illegible]ふの住ふ葛飾と[illegible]所ふ縦横九尺の庵を
あれてたゝ[illegible]くすある事もたゝき讀経礼佛のほゝまハ狂
句をさのみて乞をもて身のつくれ所ませんるとゝされ[illegible]ろ

其由とゝ以別号を人のきはいつるに堂と空ひらゐ幸の
うゐけゝて屋そ其由乃名称拵て月川とよられるまゝ
樟室なゝも幸ゐのみ拵まいれうゝゝ乃庵乃名称多ゝ
すてに世を捨まゝ名称すて風雲にたゝ多心の中いゝは
を孫ゝ堂乃むゝ弟ゝ乃くも加ゝさゝと世ゝゝ此因乃海
屋まうゐまひゝゝおほむ神乃ゐまの宮ゝの多まひゝ
多賀大社ゐほうへてゐれ社造営の事ゐと執おこな
うれる見もかゝまゝ心乃冥意にゐへゐ乃屋ゝれと
みつゝもゝ多まひきゝかゝれくてはひに寛政庚申
四月廿日大ゐかゝまゝ体堂けるひゝゐれゐゐみとゐゐへき

拘礼ゐまハゝてゐの心拵ゐゝ狂句若干をけゐゐゐ求て
屋方にわゐちゝゝせんとゝふハ因人塘里等ゝけゐゐゐ乃心ゐゐ
ゐ屋わまゝまゝ上人乃久ゝ紀知音まてゐゐ志ゐゐくもいほ屋
ゐゐゝ屋ゝ因孫涉ゐゐねハ一ふと書ゐくゝゐふ侍ゝ懐奮の
ゐみゝ称拵てまれを志ゐす此集やけゐゐゐと上人の本屋
ゐハあゝけゐゐ屋ゝ

題祇徳法師句雙紙

ゆふ屋の山に雲はゝゝ屋て杜宇乃帰ゐゐゐ有明月乃
馬哪て雲雀の寺ちゐゐあゝ聖の原ゝけゐ男ゐ花舟のわゝ
屋の布せまくて笠にゐさ多ゐけゐ盈の屋すゝの松の葉蔭よ

薫風を懐ふてねむりし夜の面影のあるかたち
なれも多日の轉變旅あそびなれ下をうるまし俳諧の
連句あとふもなく句にかなをゆく雲紀もく捨あ侘
なりきすへて世中にたちめぐる人のすさみも帆あげる
船の風にあすなるかふ月日の旅なりしてて
まさ行るやはきは翁もいへるなり世を旅て代るく小四
乃とるはといたく東海道の一すちもあるぬ人の風雅に
おほつるれ也

吟社懐舊録跋

人乃心のたるるはるおりて乃ちしやはまにひとし紀

人しなるまを少もこさるはまと行のつるおれるも
心おもきこ友の形てやはる人の面かひ下ちすして月
行ふへしわ蓬窓下月ふりて月ふれよひの淋しき形
くむりしを名ふる人くの形くるもし年月紀
法書よりくはと人ふけるるとなしわすまてと
爺のそにを付る物ふを形ふ浦生の中埜生の物
るるなしに彼人乃伯父吾扇老人ったのおくをあつ
めて仮ふ懐旧録と名はまて平等回向の念佛朝申ふよ
はとめるるし老人たくるるて後はの志乃むたしく
形人も念るまをは見を板下るを同好の俳士まつち

あこ屋ん堂てわまに校正せすとふ老人のいける世て
たひよりに志く程すなりそれ志のいけるもあ
る浜ゑまて有ひとり記老婆心ある紙とそれふるを
あるひよ換益して是はるを見をん人たゝへ
る紙あくしもれる紙おきあひもをんい中埜せう
祝ひ也といふをまとわまにひとり記人くて
告すうす事にかむ

書句合後

なるすひの露はゝ什乃東草堂巳水楚くいふまな
ほ支に詩句合を判せるふ人はるはけるをあるをひふ

ゑうい心を入侍まるもそれハけるうれそれふて今ハ歌乃
掬も拂ぬ紀年月を経るうちわすまるる多紀まとさすに
いあ〳〵あつ〳〵くそ添筆やうてう有紙書はく
東郭乃瓜書泥の芹所よりけるる味ひをぬ〳〵さを歯そは
ろにはす事みる差圃の身て八甘安をも淡〳〵と和はゆる
多ゝひ松はるる屋〳〵多〳〵茄子の肥るそれもはく事のかは
それもゑ多楚れくくの姿ゑて瀛八見非ゑわるへかゝに
ゆそて

書句合判辞後

世て松を添しき鬼をゝを画るゝ丸ハちちまハ似はるあと

けもあるべくおぼゆるに犬馬れいの目よりてはれ物ゆゑ〳〵ていふまでやとれかゆれもあれ常に名のもれく実すにかれハ人〳〵の目ゆゑ心ゆもよくおぼえあるまれまでいさゝれあうひめもめふハ多りなる俳諧の短句はゝるゝ世にいひあまるる俗談をもてはゝ多はまハすゝしのゝちめも耳たちぬ〳〵れ世句合といふれれ小判のあゝ繁ゝ〳〵ものそむ人あるまわまる多田乃森ゝ多に松ゝせをのゝ聞ゝるまて琴をおゝもこゝわゝまゝすいゝもむや蛾ゝ洋ゝ乃音ゆおいていはいゝ〳〵れ屋ゝれれゝはまゝと目よちゝれ俗談あまるゝちゝせてゝ

あゝをゝまゝわまゝ侍ゝるゝれ心乃あれハわゝちゝぬ處あゝ屋ゝれゝ犬馬のゝちれ屋すれ所ゝはれてゝふ乃ゝ乃ゝまゝに人あゝて曰他人屋上の雲ハ雲もかくにも自己身上の風雅ハいゝふゝわまゝへてゝふ屋ゝわゝをひゝ乃あゝゝまハ他人の手をゝれ乃ゝれまゝ

畝傍草序

山田ゆ水をはゝすまハゝゝわれ身にも雑れく古紙みゝゝ畝つゝまゝと名のゝ人あゝ歟乃柄も汚ぬ〳〵きあゝれ日ふおゝりあゝ田子乃裾をぬゝして見をいゝあむゝれゝ風人騒客乃心のあひまれてゝ楽ゆ紫ふくをゝむゝと

あゝしけきを秋乃田のみもたのもしく花實ゆ所ゆゝ
おもひおめたり今の世乃流ゆゝハ稲葉の風乃うゆくゝとして
いふも姿のむつゝしきをうゝゆおりよふ和哥ハ文覺たゝて
徐ゆやゝ雅をさゝくあゝき也ハいちゝるゝて又由ゆ
世ゝうくもゆゆるゝなゝと慈鎮和上のおゆもゝゆゆ
おのゝたゝゝかゝくゝと又日かゝの文字ふゝうやゝゝして此国の
人い哥乃みちをゝたゝふおりふゝゝうゝゆ多ゝたゝの国ゝくの
風俗也と此撰者もおのつゝ国ゝく乃流行をゝんゝゝて其
境界をたゝゝむとゝふ心ゆるゆゝゝ　撰者ハ三鴨乃麓ふゆ
雲蓋戲ゝゝゆ乃数言を題すゆゆゆハ多田乃老圃夏
成美也

書水音集後

むゝゝ佐國といひゝ人乃ちゝはの花ゝおゆひゝゝたゝ秋
ゆつゝゝみて園乃美樂にあまたゝゝゝゝて今ゝの據を
ゝたゝけゝめゝゝゆゆ枚長ゝ蛙を色すゝ時ゝゝゝの多ゝひ
ゆゝて秋乃さゆゆゝゆゆ声をおゝめてゝゝ冬さゝゝゝの土ぬゝ
こめたゝ屋ゝ所ひたゝて山田に水をゝゝすゝ法ハゝれゝ
ゆれゝるゆくねをゝゆつもひゝゝへに師とたゝのゝゝる人乃
色ゝゝんたゝゝをたゝむゝゝゆゝゝ蔭ゝゆゝゝひゝゝ人をゆも
ひて井栄の木もれきゝゝたゝゝゝゝ枚長たゝの人なゆゆ

櫻句帖序

佛はいにしへの人のれをたてすつまて後の世の為てきこえ
おしへ給ふ西上人の花をこそ出羽の國
大舘浄應寺とりわけひろき木の橋あるを誰此みほと
をにうる種をたて給ふをおしへけん今はひろき國の中に
あふひ多くおほえおる本をあつてふかく慈眼をみをるに
ちよの多へしるれのはかあるをあつめぬ雲をあつめ雲に
跡はなるれ多くにひはは堂にみちはよ弥陀のはひ
ををくて法をの極樂あるもいへ見るかう
一味の法雨に潤ひて心ある草木までも浄土の縁をむすへる

ありしにはなへる人の一句一詠をあつて花ハやう
くあらはるるも色香のをみはかくをはらんをと
句帖といふものはをつて人くに筆ををしへ此ちも
むををはしめ書法をと尋風の許をいひ
いまを目ふれぬをひあるを吾もをと花にをむ心のふき
あをにおのひあるのをを見ををすれは極樂もはとめて到る
所をきけハをを法の津ををしへを千里の外のをを川の
花の蔭あつて花をを花を流に筆ををを

句帖序

春の雪窓ををて掬いをひをを履を法の杖をひむ

ても老懶ちんうさあくたるて一炉ふくぬさ炭球あはく
吹おこうてひゝ釜こいつもれうてひねもす茶をすゝる
あるをちろれ何うゝ乃老人れれの世捨人なと膝をなゝへ
て終て腹ふくゝゝむのく六盌の奥て入茶具なとふさつ
みゆ取おて見ハ唐屋うの物かもハ誰〳〵の作まる物と
おゝ〳〵てふいゆにつるて手中のひゝをういふやうな屋て茶をと
いふもよく名あるき人の書付あるあるたみるものも於れふ
心うはまて屋て於のものときををゆゝあるをたゝへ
屋をすをちちなうとも茶乃湯に用らるとをちひはきを
見ることを侍おるの見さゝやいふあるて利休のをるよう〳〵

其角ゝ雑談ゝも書あれ侍しゝれ人のをてたをひしゝといふものゝ
或ハ花押をを加へゝる物ををていいふも故たるく紀器あれやを
おのをゝ心にをゝけをて みるゆ名に侍をのやあるをたさゝゝう
ゝれるを ゆく屋紀ふや六塵の境界も物ゝほゝをれに真
空の理をおもひあをゝむふ球佛のけをもゆ侍をを
もよくゝゝをるもいひあゝに此をゝをを為をむをを
佛のみちゝをにゝををおゝひをゝふハをゝの車をゝるを
みをゝくゝををみわゝふをゝふ秋田乃一樟ゝ句帖といふ
ものゝはゝ屋にものをて多〳〵といふに人〳〵の句をゝる
も侍ををををゝ今の世ふ名たゝ不他者乃ゝゝ〳〵ゝる

句なきハふかき故ハあしんなく名ありおもしろき人乃言に
はなされてたくましき乃こおもへなりしへしひとへにその真よ
せゆりまて句〻の骨髄をよくうちはなおの法りおもしろき
所ハ忘りまき侍らん称掲くるもののをうちもなりしく座りて筆
やりまて序の心に出付侍る

勝鹿日記の内

ちらめくむつらし紀日郡くへしむつくしき頭いつ紀よ窓の戸
もあなを上野のちれみしるすれともよふへまこるをおりひ
みるれよ並ぶすれかて人の入来ていりかさやなといふもの
すなしゆるまきひま法し名臼の茶家をひらむと大切く
かねてちみ中のよしれしおとかなる雪れりちきれなりつめに
れりしはりまひまおはりはちくやふりたて中川一盆
すむるよおうち法を広りるまむりし　此茶よ今の世乃やうに
人ごとに好きをねむ頃鎌倉の旧館のすむしわりしをを頃ふて
ひるゆてる起出りま玉子ねを栄西上人乃濃茶一服るてま
はりを頃ふになおまれく心よくおりしせ頃ひし喫茶養生
記といふまきの時をそへ頃ひりるなといひいそ毎日頃やまた
ぶのうさをおりあわして

竹を見る心やれりて春ハゆく

四月一日　花の浪ふ山りせもわか翠の梢よ吹行りたま

つて多田の麥乃みどりを夏にあらぬ

六月もくれはちらく松の朝露紀

金翠吹石蒼波をよわるき人く来てかるみて

題をとうち句をふれの法師はめはせめ紀るる

おるをいひおもふかをを俳とよすの餡乃うはきう

味噌漬あるかに心ひうあるいひてわらふ旧國う小豆

乃うに秋のをこうちあるうたふうるあるくをいひて

はるとふその日乃題

松山乃うぬるたうあはるきを

公事に油うけるを辻地藏

二日をうく起をたるうしはひ産を紀るうせうし

あるに物の幸をはるうをてきねふ新淺草のかも

耳ふやにひうき為るゆめうちにおうひ残をて十はと

みそう結といくもはくあるうあはえてうはく心いと

はるはすひうく乃雪のかちくをふきうをうまる

おとまてはおと目ハはえうあふみ社五来をを書音

はうるふくゆのくひうきうあふかにくと書てはるを

江戸小はうひりるるおとおはくを出せるを

五来をおもふ

はくおう乃袂うをまはつ裕

芝の便りあるとて拙作をとゝのへ来れる浪花の俳人等の
清原氏乃女の名をうけて出るもいとかの貫之ぬしの
日記乃おもかげをかゝこゝはとゝろはく句をれゝ爲たゝ
雲かゐの画もおのゝゝむりしめ紀て爲ゝし糸のうさを
はてゝとゝけゝにはくをおもふ今の世乃上をといふめる長
齋魯隱自樂芝の外乃人ゝちゝ額をけそせ據ををみはく
うめ紀生るもはゝ紀をハなるふゝの見けめするおとあゝむはめ
ゝを却ゝしくはゝよくをゝむ附合のめてゝ紀句ゝに
うゝを世くけをゝ海旅四く人乃浦里に眼をけゝたむる
人地をする發句をゝもゝ芝かゝゝをかゝうへかゝゝ紀

ゝにすめるも爲此人等ゝにゝを海紀ひあるいを爲す
芝紀を寫乃おゝを笠の上の雪ふのせゝゝむもたゝへは
爲をむゝけゝゝ乃む晋子丈草かとゝふ人のふゝひ此世に
けをふをもゝのゝ紀ぬゝもはゝぬ爲
夏の日も爲ゝゝにはをゝゝ
をそほゝ紀く日をぬをゝおゝふに長齋八年おゝ紀唐の
ふみはゝけてけをひゝ人のいゝを心乃ゝ紀をめをや
此はいゝ名体の句に心いをそゝをゝをゝゝの本才のゝ
ゝを紀ゝあゝ来れをかゝう句おゝにおゝゝゝきゝのいて
きゝゝむををそれはゝゝゝ紀ゝの俳乃みをのゝきをを

多ひそめあるこゝあり きたるこゝに秋の風や爲ちなめけむ曾
隠ハさ川に江戸より人をとゝめて川の舟をもふ
して志ほさゝれる鳶のさわくを見て志ほりに古園をおもふ
心をいひおこすれと多目のまゝの屋うちを
すみを河ちうをを外く紀因古鳥
三日 爲ふりていやををしき紀ものあるをむつうし
きにゝ那屋め爲と屋つうを千住といふ所より屋ふく
ちゝうを二本おくと為て
爲市の子やかとゝみ多れ爲て付て
冒も五月もあめ屋ゝを志ふゝハ芭のゝ爲紀由爲に
あゝ〳〵ゝ志ちゝを〻まて降ぬき紀むと人のゝふ
う紀るゝや桶の中ゝて五月雨

四山藁卷二終

○博覽古言　古名菅蠡鈔　全五冊

此書菅相丞相撰集也林道春先生旁ハ國字多く清解ハ多ハ童子ハ文ハ法ハ出ル也ハ書なり經ハ七經孟子より史ハ左傳淳史ハ外備ハ古書の中より金言玉語ハ技部を十三門ハ分て君道政事文學武備礼法政制刑法祥瑞祭祀人倫人事ハ道風俗人物名勢の格言ハ多ハ事形ハ多ハ出ル書とハ云ども皆ハ敬ふべき出あり

○温泉考　古河雙桂先生著　全一冊

世人疾ハ多て温泉ハ浴ハ人ハ多ハ試法ハ多ハ試ハ害ハ多ハ樂ハ多ハ有て是れを先生ハ深く經紀ハ多ハ病ハ損益の試ハ中ハ試ハ多ハ一旦温泉の湧ハ出る山ハ多ハ有る度理ハ人事ハ出ハ引く法ハ一婦人ハ有ハ疾ハ疾ハ出ハ多ハ人ハ多ハ深く解ハ多ハ人の書形ハ湯治ハ志の人業ハ出ハ冊ハ出ハ人ハ

○日用贈答書札辨惑　上原茂稚先生著　口傳集共　三冊

世間通用の書札美ハ紙ハ外ハ出ハ不拙ハ法式ハ出ハ紀ハ不拙合ハ文言文字ハ誤ハ有ハ出ハ引ハ上ハ氏形秘ハ出ハ口傳集ハ附板ハ初ハ墨ハ紙ハ来ハ書ハ古実ハ有ハ沢ハ出ハ車陋ハ有ハ

○訓蒙天地辨　高井西我先生著　平がな繪圖入　三冊

此書ハ天地の中ハ有ハ物ハ出ハ天學數學ハ有ハ理ハ日月ハ運ハ雷地震ハ有ハ出ハ身ハ自然ハ有ハ紙ハ童蒙ハ易ハ繪圖ハ有ハ解ハ書ハ

右ハ本屋ハ新ハ出ハ

板元　江戸浅草茅町二丁目　須原屋伊八